『東国太平記』と『武辺咄聞書』

菊池　真一

一　『東国太平記』と『会津陣物語』

『東国太平記』は、『雨月物語』「貧福論」の岡佐内（岡野左内）の話の注釈に際して引用される以外、余り論ぜられることがないようだ。本論では、『東国太平記』と『武辺咄聞書』との関係を調査し、併せて『東国太平記』について気付いたこと若干を記しておきたい。

『会津陣物語』（『会津軍記』）なる写本で伝わる書物がある。私は内閣文庫蔵の『会津陣物語』（四巻覚書付二冊本。書写年不明）と『会津軍記』（四巻覚書付四冊本。正徳四年十月写）とを見ただけだが、共に末尾に少し欠けがある。『改定史籍集覧』の翻刻はこの内閣文庫本によったものであろう。ところが、これは『東国太平記』と同じ内容のものである。

『東国太平記』には宝永三年刊の版本と写本とがある。私は、版本は内閣文庫蔵の三本、写本は内閣文庫蔵の二本と東京大学付属総合図書館蔵の一本を見ただけだが、これらの写本は版本の写しのようだ。『通俗日本全史』『戦記資料』は版本の翻刻である。

版本『東国太平記』の序文は次のようになっている。（引用は『戦記資料　東国太平記　新編東国記』〈昭和五十四年。歴史図書社〉による。返り点・送り仮名・振り仮名は省略）

近代軍記、行于世者数部矣、雖然皆闕会津戦争之事迹、諒不能無遺憾焉、以故酒井讃牧左少将源忠勝苦捜索、数年于

茲、時麾下之士有杉原親清者、是乃上杉宿将杉原常陸介親憲族、而経歴北越東奥数十戦之徒也、忠勝命之、令輯慶長庚子辛丑之会津戦伐之古事、錄筆記焉、戮牧台閣繁務之余暇、説之賞之、甚以為珍焉、我僥倖得其書于敦賀商舶、而弄賞有歳、竊以上杉景勝謀略勇猛剛算倔強、卓落于近世独歩於一時、況於会津守戦奇画、最上攻撃勇悍、一日拔数城、勢如破竹、至夫福島松川之戦摧政宗堅陣、奪伊達雑幕者、其勇威亟名冠于天下也、我苟欲傳上杉武勇徽蹟于後世於盈雪之下恭起麁毫、而訂正杉原氏筆記、以備後覧者然矣、時延宝八年庚申冬十月良戊　国枝清軒謹題于江州大津西湖楼

『会津陣物語』（『会津軍記』）の序文もほぼ同様である。また、『東国太平記』の末尾は次の如くである。（内閣文庫蔵版本による）

右者聞及見及候実義ヲ書顕者也

寛永元年甲子孟春吉日　　杉原彦左衛門親清

宝永三丙戌九月吉祥日

書林久保田九郎左衛門

『会津陣物語』（『会津軍記』）には、この部分は欠けている。寛永元年とは、直接には巻十六「杉原彦左衛門物語覚書条々」の成立年代を示すものであろうが、ひいては、『東国太平記』そのものの最初の成立年代をも示している。

これらから、寛永元年杉原親清によって著された『東国太平記』（或いは最初は『会津陣物語』又は『会津軍記』という書名であったか）は、延宝八年国枝清軒によって手を入れられ、宝永三年に至って刊行されたものであることがわかる。

延宝八年といえば、『武辺咄聞書』（『武隠叢話』など異名多し）の成立した年である。『武辺咄聞書』の奥書は次のようになっている。（宮内庁書陵部蔵十七巻三冊本『武辺咄聞書』による。返り点・送り仮名省略）

右九冊者名武辺聞書也我牢人久住江州大津与諸家牢人令参会聞其家々之伝説而令筆記畢我祖父松本本助上杉謙代之侍殊於最上口長谷堂遂討死依之多聞伝上杉家之事書入之者也

延宝八年庚申霜月吉日　　国枝藤兵衛入道清軒

『武辺咄聞書』はそう短期間に成ったものとは考えられない。その編纂過程において、国枝清軒の祖父松本本助についての記述を含む『東国太平記』が材料として利用されたことは十分考えられる。

二　『東国太平記』と『武辺咄聞書』

『東国太平記』と『武辺咄聞書』とを突き合せてみると、果して、同一の素材を扱い、類似の記述をしている話がいくつかある。便宜上、『東国太平記』の記述順序に従って、それらの話を列挙してみる。（目録の引用は『戦記資料』による。返り点省略）

巻第一　太閤秀吉公寵臣逆心思立事〈A〉

◎石田三成と直江兼続とが謀議。直江、蒲生氏郷を毒殺。

巻第二　第一話　上杉取立神刺原之新城事〈B〉

◎前田慶次郎の逸話。

巻第三　於大阪城上杉退治御評定之事〈C〉

◎石田三成より直江兼続への手紙。

巻第四　第一話　上杉景勝白川表軍兵手配之事〈D〉

◎白川城攻撃の陣立て。

巻第四　第四話　御所会津御発向　付　花房注進之事〈E〉

◎石田三成より直江兼続への手紙。

巻第六　小山御陣御評定　並　本多中書横原式部御薬合之事〈F〉

◎小山に於て評定。上杉義春、徳川家康に味方すべきを説く。

巻第七　伊達政宗帰城　並　攻取白石城事〈G〉

◎加賀大聖寺浅井畷の戦い。

巻第八　政宗自白石城引退岩手沢事〈H〉

◎勢州阿濃津の戦い。富田信高の事。

巻第十一　第一話　直江山城守兼続攻入最上事　並　攻取幡屋城事〈I〉

◎直江兼続幡屋城攻撃。

巻第十一　第二話　直江山城守与諸大将軍評定　並　攻長谷堂城　付　最上義光後巻対陣之事〈J〉

◎直江兼続長谷堂城攻撃。

巻第十二　第一話　最上義光被乞加勢於伊達政宗事　付　政宗加勢事　並　上杉方松本本助討死之事〈K〉

◎長谷堂合戦、松本本助討死。

巻第十二　第二話　上山之城口合戦　付　上杉方穂村造酒允討死之事〈L〉

◎上山城合戦、穂村造酒允討死。

巻第十二　第三話　上泉主水討死之事〈M〉

◎長谷堂合戦、上泉主水討死。

巻第十二　第四話　自会津遣飛脚告関原口敗軍之由於直江陣事〈N〉

◎関ヶ原合戦、西軍敗北の報入る。

巻第十三　第一話　直江山城並上杉之諸軍勢引払長谷堂口事付洲川合戦之事〈O〉

◎直江兼続陣払い、洲川合戦。

巻第十六　杉原彦左衛門物語覚書条々

第四条　前田慶次郎事〈P〉

第五条　関原以後直江事〈Q〉

第十六条　岡野左内事〈R〉

第十七条　青木新兵衛殿之事〈S〉

第十九条　長井善左衛門事〈T〉

では、国枝清軒は『武辺咄聞書』を綴むに当って、『東国太平記』をどれほど利用したのであろうか。その辺の所をもう少し詳しく見てみる。

A・C・Eは、『武辺咄聞書』に於ては一話の中に現れる。石田三成と直江兼続が共謀し、関ヶ原陣の因を作ったという話であるが、『武辺咄聞書』の記述のうち、半分強は『東国太平記』の記述と類似する。特に、石田三成より直江兼続への手紙二通は殆ど同じである。関ヶ原陣の原因についての捉え方も両者一致している。国枝清軒は『東国太平記』以外の書物も随分調べたことであろうが、特に『東国太平記』に共鳴する所大であったらしい。

B・Pも『武辺咄聞書』に於ては同一話の中に現れる。但し、『武辺咄聞書』では、前田慶次が利家をだまして水風呂（文字通りの）の中へ入れて逃げた話、これも詐欺的な手段で林泉寺の和尚を殴り付けた話、風呂に刀を差して入り、他の人もそれに倣ったが、実は慶次のは竹の筧であり、他の人の刀は使い物にならなくなってしまったという話、など、面白い話を載せているが、『東国太平記』では「此者の事語るに言なく記すに筆も及ばざる事ども」として、皆朱の鎗・白四半の話しか記していない。当然、これらの話も『武辺咄聞書』には載っているが、国枝清軒の調査の徹底の程が伺える。

Fは、小山に於て西軍挙兵の報が入り、諸将、大坂に置いている人質の妻子のことを気にして動揺が見られた時、上杉義春（畠山入庵）が、人質は秀頼公へ差し上げたのであり、それを石田三成が横取りしたのだという論法で、家康に味方すべきを説いた話である。『武辺咄聞書』も『東国太平記』も似ているが、『武辺咄聞書』には『東国太平記』に現れない「桑山左衛

門佐」という人物が登場しており、この話自体が桑山左衛門佐らの語ったものだということになっている。また、『武辺咄聞書』には、上杉義春について、他に松平右衛門大夫正久の語った話、水野日向守勝成の語った話が載せられている。Fについては、『東国太平記』によったというよりは、国枝清軒が独自の資料によったものと考えたい。

Gは、大聖寺・浅井畷の戦いである。『東国太平記』も『武辺咄聞書』もよく似ているが、『武辺咄聞書』は、最初に、

加州小松表浅井畷ノ合戦諸書ニ記ト云トモ誤多シ我成田介九郎ニ逢直談ヲ聞シニ依テ委ニ住ス（本文引用は宮内庁書陵部蔵二十巻五冊本『武隠叢話』による。以下同じ）であり、最後にも、

此物語ヲ成田介九郎ニ直ニ承ル間書付候故其後松平久兵衛ニ此書付ヲ見セ候ヘハ少モ違無之ト申シ候間令筆記畢

とあるから、『武辺咄聞書』が『東国太平記』に拠ったということは言えない。

Hは阿濃津城の戦いであるが、『武辺咄聞書』の記述は殆ど『東国太平記』のそれと重なる。『東国太平記』の方が若干『武辺咄聞書』より記述が詳しい。或いは、国枝清軒は『東国太平記』に拠って富田信濃守信高とその奥方の話を書いたか。

I・J・K・L・M・N・Oは一連の話であり、『武辺咄聞書』も『東国太平記』も一続きになっていて、ただ、章段の切り方が違うだけである。これだけの長さにわたって記述が類似すると、松本李助の件を考えても、国枝清軒が『東国太平記』から引用したものと考えざるを得ない。

Q・R・S・Tは、いずれも『東国太平記』の最終巻、巻第十五「杉原彦左衛門物語覚書条々」にある。

Qは『常山紀談』等諸書にも載せられているので有名な話だが、比較すると、やはり成立が古いためか、『上杉将士書上』（慶長二十年成立。寛文九年補訂）や『東国太平記』の記述が真実に近いような気がする。次に諸本の記述を列挙してみる。

或時聚楽御城中に於て、諸大名列座の中にて、伊達政宗、懐中より金銭を取出し、直江に見せらる。之を見給ひ、城州黄なき事、斯様に金銭にて銭をひ候事、見事に候事かなと、山城守へ渡し見する。山城守扇子を抜き、少し開き、金銭を請けて、はね返し〳〵見て、実に珍しき物にて候と申さる。政宗見られ、城州手に取りて見候へといはるゝ時、山城守申し候は、私事、輝虎目金にて、用にも立つべしと思はれ、景勝へ付けられ候。何時も采配を執り申す手にて、斯様のむさき器は、拾ひ申し者にて之なしと申し、金銭を

畳の上へ、扇より移したる故、政宗赤面せられ、一言の返答なかりし由。（『上杉将士書上』『上杉史料集』〔昭和四十二年。新人物往来社〕による）

関原以後、江戸、駿府の御城にても、直江山城守は、天下の御老中へ対しても対揚の挨拶にて、中々頭を下げ手を束ぬる事なし、大男にて弁舌よく、見事なる事なり、其昔し聚楽の御城にて、政宗懐より始めて金銭の出来たるを取出し、諸大名に見せられしに、皆々も、重宝なる事と手々に取つて見られ候時、政宗金銭を持ち、直江に見せられければ、山城守は扇を二間拡げ、是れにかけて見る、政宗は、我が随身の物故敬ひて手に取らずして扇にて受くと心得て、山城苦しからず、手に取つて見よとあるを、直江申しけるは、我等は景勝先手を申し付け候故軍兵を差しつかひ、采配を取り候手に、斯様のむさき物取り候ものにて之無く候、銭は下賤の持ちあつかひ候ものなりとて、扇より銭を政宗前へ投げ返しければ、赤面せられけるとかや、

（『東国太平記』）

金銭ノ初リシ比伊達政宗金銭ヲ懐中ニテ諸大名列座ノ砌皆々ヘ被見ケル折節末座ニ景勝家老直江山城在之政宗金銭ヲ山城カ前ヘ持参シ珍敷物ナリトテ見セラル山城扇ヲ抜テ一間広ゲ其レニテ羽ヲツクヤウニシテ打返々々見ル政宗ノ心ニハ我ニ随身スル物故礼儀ニテ不取手ニゾト思ヒ城州不苦間手ニ取テ被見ヨトアリ山城カ云我等儀ハ謙信側ニテ仕ハレ一手ノ大将申付景勝家ニテ只今先手ヲ仕采配ヲ取候手ニテ加様ノ賤シキ物ハ手ニ取不申モノ故扇ニテ諾申候ト苦カ々敷申故政宗赤面セラレシト也

（『武隠叢話』）

伏見の城にて諸大名幾等も並居たる中に、伊達政宗懐中より金銭取り出して人々に見せられしに、其の頃金銭の始りし比にて、珍しとて持囃さる。直江が末座にありしを、「これ見られよ」とありし時、直江扇の上に金銭を置きて打返し、女童の羽根つく様にして観しかば、政宗、「いや苦しうも候はず、手に取られよ」といひも終らぬに、直江、「謙信の時より先陣の下知して鑒取り候手に、かゝる賤しき物取れば汚れ候故、扇に載せて候」とて政宗の方に投げ戻しけり。兼続父も山城守といふ。もと僧なりしが、還俗して武勇を事としけり。

（『常山紀談』）

Rについては次節でも触れるが、『東国太平記』と『武辺咄聞書』を比較すると、類似する所もあるものの、相違点も目立つ。『武辺咄聞書』の末尾には、

其（岡野左内）子左衛門尉相続テ一万石猫苗代ノ城主ニ被

申付其子源五郎ハ浪人ス元来切支丹宗ニシテ転ヒタリトハ云ヘトモ実ハ不知夫レ故源五郎不成寄公大津ノ三井寺ニテ病死ス右左内カ政宗ト勝負セシ中ニ着タリシ角栄螺ノ甲ハ南蛮ノ伴天連ヨリ音物ニ貰ヒタル物也源五郎死去ノ後其家来共左内カ鳩胸鴟口ノ具足并角栄螺ノ甲ヲ持紀州へ下ル処ニ布施佐五右衛門ト云仁買求タル由三井寺ノ衆徒ノ語リシ

とあるから、国枝清軒は岡野左内の孫の話を聞く機会があったかも知れず、或いは三井寺の衆徒から話を聞いたかも知れぬ。ともあれ、この話については、『武辺咄聞書』は『東国太平記』に拠ったとは言えないようである。

Sは、『東国太平記』の最後には、

落合ト安曰く、青木事を永井善左衛門と取違ひ、政宗申されぬ候事に付き、秀康様へ落合主膳申したる事あり、故あつて記さず、

とあるが、『武辺咄聞書』はこの間の事情を描いている。これも、国枝清軒が然るべきルートで調べたものであろう。

Tは、『東国太平記』の記述が簡略なのに比べ、『武辺咄聞書』は詳細である。これも『東国太平記』によって『武辺咄聞書』の記事を書いたと言えるのは、

ACE・H・IJKLMNO・Q

といった所であろう。

『東国太平記』は「杉原親清撰　国枝清軒重訂」となっているが、版本『東国太平記』の本文の書き方は次のように五種類に分れる。

一　普通の書き方をしているもの。

二　「伝に曰く」で始まり、一段下げて書かれるもの。

三　何もなしに一段下げで書かれるもの。

四　「私に曰く」で始まるもの。

五　「○」印で始まるもの。

四に該当する記事の一つに次のようなものがある。

私に曰く、景勝薨逝の後子息弾正定勝より甘糟が子勝右衛門、同帯刀を呼び返され知行を給はり、唯今甘糟五郎左衛門、同久三郎とて米沢にこれあり、

これは『上杉将士書上』に、

備後守嫡子藤左衛門次男帯刀暇出し、牢人する所、定勝代に召返し奉公仕候。唯今甘糟五郎左衛門・同久三郎は其子孫なり。

とあるのと一致する。『上杉将士書上』は慶長二十年成立であるが、景勝は元和九年没であるから、慶長二十年にこのような

記事が書ける訳がない。この記事は寛文九年に補訂された際のものと考える。杉原親清もこのような記述はできない。この『東国太平記』の「私に曰く」で始まる記事は国枝清軒が書き加えたものと考えられる。しかし、他の書き方については、何とも言えない。一応本論では、『東国太平記』から『武辺咄聞書』への影響という点を中心に考えてみた。

三　『東国太平記』の挿話

【狂句咄】

『東国太平記』巻一には、次のような狂句咄が見られる。

斯くて秀吉公は、江州浅井備前守長政の息女艶色類なしと聞き及びて妾とせられける処に、文禄元年壬辰の冬より懐胎の心地なりしかば大きに悦び、四箇の大寺に課せて貴僧高僧を請ぜられ、大法秘法を修し、殊に変成男子の法をぞ行はせられける、明くれば文禄二年八月廿日安産成就の為の御祈禱に、大阪の城にして歌連の会をぞ促し給ふ、其比の花の下紹巴の発句に、

大般若はらみ女の祈禱かな

一二は過ぎて産の紐とく　　脇　昌化（ママ）

未だ百韻満たざるに若君誕生あるこそ不思議なれ、天下の大名は言ふに及ばず、下万民に至るまで千秋万歳の其声は、欣々然として阡陌に満てり、頓て元服あらせ給ひ、秀頼公とぞ申しける

この発句は、既に『竹馬狂吟集』にも見られる有名なものであり、この場合も、本当に紹巴が連歌の会で詠んだというよりは、この句を中心に据えた狂句咄と見たい。木村三四吾氏は、「ビブリア」四十三号（昭和四十四年十月）において、『竹馬狂吟集』の写真の後に解説・諸校異記・索引を付しておられるが、その「諸校異記」を見ると、この発句とそれに対する脇は、次の如く諸書に見られる。

大はん若はらミ女の祈たう哉

巻第三のひもをこそとけ

（天理図書館綿屋文庫蔵　明応八年序・永禄五年奥書本『竹馬狂吟集』）

大はんにやはらみ女の祈禱也

大経巻第三のひもとけ

（京都大学文学部頴原文庫蔵、平出氏旧本、室町末期写『誹諧連歌抄』）

大般若はらみ女の祈禱なり

多経巻第三のひもとけ

（同右、いわゆる穎原家蔵一本、近世初期写『誹諧連歌抄』）

大はんにやはらみ女のきとうして

たきやう巻第さんのひもとけ

（天理図書館綿屋文庫蔵、慶長刊十行古活字本）

大盤若はらみ女の祈禱なり

たきやうくはんたいさんのひもとけ

（同右、叡山真如蔵旧本、室町末期写『誹諧連歌抄』）

大はんにやはらみ女のきたうして

たきやうくはんたいさんのひもとく

（同右、寛永刊整版本）

有女子をうミかねければ

だいはんにやはらミ女のきとうかな　宗祇

（ママ）きやうくハんだいさんのほ（ママ）もとけ

（天理図書館綿屋文庫蔵、近世初期写『新旧狂歌誹諧問書』のうち「誹諧之部」）

大盤若はらみ女のきたうなり

たきやうくわんたいさんのひもとく

（東京大学洒竹文庫蔵、柳亭種彦筆校本『誹諧連歌抄』〈『犬筑波付録』所載〉）

大般若はらみ女の祈禱なり

多経巻第さんのひもとけ

（大阪末吉家蔵、宗鑑自筆本『誹諧連歌抄抜書』）

その他、『狂歌大観』に当ってみると、

さんせん産後にうきめをしてもこりぬは女のならひに

てくるしひけるをみて

大はんにやはらみ女のきたうには　たきやうくはんだいさんのひもとく

このうたにていとたやすくむまれければ返し

たいはんにやはらみ女のきたうには　六百貫のふせをこそすれ

（元和頃刊『新撰狂歌集』）

雑産の時大般若転読によて親子ともに事故なかりければ

は導師の許へあしにそへて

大般若はらみ女の祈禱者に　六百くわんの布施をこそやら

（寛文六年刊『古今夷曲集』）

夏の比或人の許へ菊見にまいりけるにまかきすいかき

ませかきを色々に結てきくの花の耳はおとろかさて目

をおとろかすはなのみとなるかなといふなかにも大

般若と云菊の花誠に大なればはみな人めてけるにその中
なる人我に歌よめ定る久しきやくそくの花見なればはら
み句や侍らんそれは面白からす何にても当座の歌よめ
と戯けれはその言葉かりてよめる
大般若はらみ句ありと菊の花　そのすひかきはおかしませ
かき　（寛文九年奥書『卜養狂歌集』）

などの例が見られる。

【岡野左内の話】

岡野左内は『雨月物語』「貧福論」で有名になったが、秋成がこの話をどこから仕入れたかとなると難しい問題だ。岩波古典文学大系の頭注で、中村幸彦氏は、岡野左内の逸話について『翁草』『老士語録』『東国太平記』『常山紀談』の四本を挙げておられる。

『東国太平記』『老士語録』には、「貧福論」に現れる、黄金一枚を持っていた男を褒めて、十両を与えた、という話は出てこない。『翁草』巻三十三の「諸録抜萃」と同巻百五十八に「岡野左内の（が）事」という記述があるが、これはいずれも『武辺咄聞書』からの抜書と思われる。（拙稿「武辺咄研究―『武辺咄聞書』基礎調査―」〈甲南女子大学研究紀要」第十九号。昭和五十八年三月〉参照）『常山紀談』は、元文四年草稿成り、宝暦年間に改稿成り、版行は文政頃である。すると、浅野三平氏が、『上田秋成の研究』（昭和六十年二月刊。桜楓社）で述べられたように、『雨月物語』以前にこの話を載せた版本は見当らず、秋成の見た可能性が最も強い写本は、『武辺咄聞書』類だということになる。

前に触れたように、国枝清軒の上杉家に対する関心の強さを考えると、浅野氏が言われるように、

岡左内説話の源流は、今の所、この国枝清軒の著述から誕生したと考えられるのである。

というのは、妥当であると思われる。蓋し、拙稿（前掲論文及び「『武辺咄聞書』と『常山紀談』」〈甲南国文」第三十二号。昭和六十年三月〉）で述べたように、写本といえども、『武辺咄聞書』の流布状況はかなり広いので、秋成は『武辺咄聞書』類の一本を見ていたやも知れぬ。

浅野氏は、「岡野左内」ではなく「岡左内」が正しいとされるが、『武辺咄聞書』類の中でも、ざっと見た所、

宮内庁書陵部蔵二十巻五冊本『武隠遺話』
内閣文庫蔵二十巻十冊本『武隠遺話』

の二本は、「岡左内」としている。参考までに記しておく。